

# その人の太平洋戦争 — 戦後七〇年に寄せて —

宮下 淳子

はじめに

戦後七十年という節目の年に寄せて、ある二人の方の戦争体験を取材させていただいた。

一人は荒木英昭さん。筆者の遠い親戚にあたる方で、御年八十三歳。戦時中は広島市の中心部で生活し、八月六日、広島に落とされた原子爆弾によって、七十年経った今でも消えない傷を負った。筆者の親戚のなかでも、直接被爆した数少ない人物である。直接お話を伺うことはできなかつたため、電話で当時の話をしていただいた。

もう一人は越智實さん。この方は筆者の祖父の双子の弟にあたる方だ。戦時中、祖父や實さん家族は満州にいたということである。病で話のできない祖父に代わり、戦時中の暮らしについてお話ししてください

た。昭和十年（一九三五）生まれで今年傘寿になられたこの方は、尾道市立大学の前身、尾道短期大学の経済科卒業生でもある。

身内で恐縮ではあるが、近年継承が叫ばれている戦争体験の一つとして取材したものを纏めた。広島県、また尾道市立大学ゆかりの人物の体験ということで、ここに掲載させていただく。

凡例

- 一、次から掲載する話の中で、現在はわからない地名が登場したり、年齢等にずれが生じていることがあるが、話者の話に従いそのまま掲載している。
- 一、話者の発話に沿い、地名にルビを振った。
- 一、注記が必要と判断したものに關しては注を付した。

## 荒木英昭さんと広島

被爆当時は、ちょうど十三歳。比治山ひじやまにあった広島商業学校の、一年生でした。

中学生と言うてもあの頃はあんまり勉強することはなくてね。広い道路を作るために毎日家を崩しに行きよったんです。八月六日も、そのために比治山におりました。そして八時十五分、原爆に遭った。

直撃を受けたんかなあ、と思うたんです。どう言やあええのか……ものすごく大きな火花が、青白い光線が、一気にぱつと空から降ってきたような感じでした。それからまもなくして爆風が来るわ、砂埃が舞って校舎が崩れるわであたりが真っ暗闇になったわけよね。

僕も爆風で吹き飛ばされて、気絶しとったんです。しばらくして気がついたときに、軍隊が側にあつたんでそこへ逃げ込んで一息つきました。

シャツ一枚で爆心地の方角へ向いていたもんだから、上半身のほとんどをやけどしとった。生きていたのは、運が良かったと思えますよ。皮膚はもう、身体から垂れ下がっているような状態で。でも軍隊じゃあ治療はできない。というわけで、何かあつたときのためにと作られた、比治山の裾の方にあつたトンネルへ

行き、ここで治療を受けました。まあ治療と言っても食用油を塗るくらいのも、応急処置なんだけど。やけどか放射能のせいとか、とにかく口で説明できないような鼻につく臭いがしよったね。

夕方までずっとトンネルで休んどったんですが、四時か五時頃、家へ帰ろうと思ひましてね。今の平和大通りを通って、家のある西へ向いて帰りようたんです。

僕は怪我がひどくてあんまり市内を歩いたらんのでよくは覚えとらんのですが、このときの街の光景については、『はだしのゲン』<sup>(1)</sup>という漫画に詳しく描かれとります。

街があちこち燃えとつたのは僕も覚えてます。ものすごい熱風でとても暑かつたもんですから、この時は家に帰るのを諦めたんです。

八月十日頃だったかに、金輪島かなわじまというところに行きました。宇品港から上陸用舟艇<sup>(2)</sup> っていう軍隊の船に乗りましてね。原爆に遭うた人はみんなそこに収容されて、介抱してもらうたんです。じゃけどまあ、そこでも毎日人が死んでくわけよね。毒が回るのもあるんじゃないし、全身やけどしとる人も多かつたし。そもそも特効薬っちゅうのがないけんね。塩水含ませたガーゼを当てたりして傷を治したんです。

十四、五日の終戦頃に、また船で別の所に転送されました。大竹<sup>おおたけ</sup>というところにある小学校が救護所になつとつて、しばらくはそこにおつたんです。十月頃になつてようやく少しは傷が癒えたから、家に帰るところにしました。

汽車で広島駅に着いた途端もう、ねえ。一面焼け野が原で何にもなかったよねえ。家はもう、全部焼けてね。広島島の爆心地から近かったから全部焼けてました。(家にいた) 家族は皆そこで死んどります。

爆心地から二キロくらい離れたつた比治山にいたのは、本当に運が良かったんでしようねえ。わしと同じ小学校出身の同級生のなかにも、ちようどあの日、今の原爆ドーム周辺に集まつつた人もいて。何人かはそこで死んどります。まあ原爆に遭つてからは、友達の話はほとんど掴めとりません。一人二人は会つたんじゃないけど、大部分は死んじゃないかと思う。

また、私は原爆ドームの近くにあつた本川小学校というところを卒業しとるんですが、ここの学校にいた生徒と先生で生き残つたのは、二、三人しかおらんのです。もし卒業したのがちよつとでも遅かつたら、わしも死んどつたかもしれせん。

家も両親もなくしたわしは、また比治山に行きました。比治山つてところは、西側はひどく原爆に遭つたけど、東側は爆風だけで済んで、焼け残つたわけよ。その東側にちようど母のお姉さんがいたもんで。しばらくそこでお世話になりました。

しばらくして、三次<sup>みよし</sup>の学校に転校しました。もといた商業学校はとでも行ける状態じゃなかったの。今の、カープ<sup>(3)</sup>の監督だった人がおるんですが、この人がわしの母の兄になるんです。三次に疎開しておりましたこの人の家族に、今度は世話になりました。

三次に一年くらいおつた後、また広島の中学校へ転校しました。もといた商業学校ではないんですがね。

まあこうして、あちこちの親戚のうちを転々として生活して、幼い頃を越えたわけです。

傷跡は今でも残つとるんですが、最終的に傷を治すのに役立ったのは、ツワブキの葉ですね。疎開先で見付けたものなんです、この葉を火で炙つて傷口に当てたら、ものすごく早く治つたんですわ。毒を吸い取るんでしようかねえ。

先ほど塩水を含ませたガーゼを当てたと言いましたが、あれつてガーゼが皮膚にくっついちゃうんで、なかなかきれいに治らんですよね。そもそもこれをし

て傷が本当に治るのかもわからんし。

ツワブキの葉を当ててるつちゅうのは人に教えてもらったことなんです、これのおかげで比較的傷を痛めんと、きれいに治ったんだと思っております。傷が完全に癒えたのは、原爆に遭ってから七、八ヶ月くらい経ったころですね。

両親と祖母、弟二人はなくなりましたが、爆心地から離れたところにいた姉二人と、三次に疎開しとった弟は怪我せず助かりました。弟はなるべく親戚の世話にならんようにしたいってことで、似島（のしま）にあった戦災孤児のための施設（4）で世話になったんです。そこで学校行かしてもろうて、一人前になったようなところです。僕は学校出るまでは親戚には世話になつとりますが、まあこういうことです、上の学校に行くようなこともようしませんでした。

落ち着いて暮らせるようになったのは、昭和二十五、六年くらいじゃねえ。学校出て、就職して、一人で生活できるようになったぐらい。

そうして結婚して、子供が生まれて、その子供が活躍するようになって。平和になってから嬉しかったのは、このことじゃね。

アメリカに対してはまだ、複雑な気持ちはありますよ。戦争じゃけえしょうがないとはゆうても、無差別にあんな爆弾落として、罪のない人をいっぱい殺してるけえね。

じゃけえ、戦争だけは何かあっても、どんな理由があってもしちやいけんと思う。

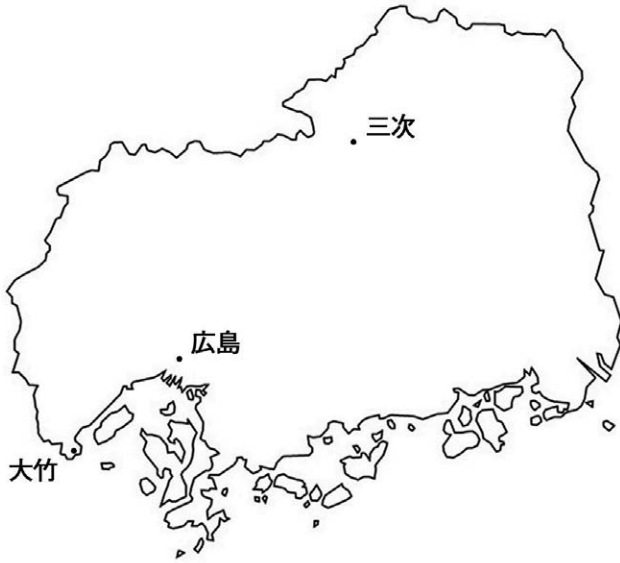
今の世の中は、良い悪いでゆうたら、一番ええときじゃと思います。戦争もないしね。じゃから今は、健康が一番じゃと思う。お金は第二問題。とにかく元気でおれば、なんとか楽しんで生活できますよ。

〔注〕

〔1〕『はだしのゲン』…中沢啓治による漫画作品。一九七三年から一九八五年の間にさまざまな掲載誌で連載された。広島に投下された原爆で家族を亡くした少年が生き抜いている姿が描かれている。作者自身も小学校一年生の時に広島で被爆しており、そのときの体験がもとになっている。

〔2〕上陸用舟艇…上陸作戦に用いられる舟艇。

〔3〕カープ…日本のプロ野球球団。広島県を中心に活動している。原爆による壊滅的な被害を受けた広島復興の一助を理念に、昭和二十五年（一九五〇）、「広島カープ」とい



【地図1…広島県】

う球団名で発足。昭和四十二年（一九六七）に、現在の名称「広島東洋カープ」に改められた。

(4) 戦災孤児のための施設…昭和二十一年に旧陸軍似島倉庫を改築して作られた似島学園のこと。戦災孤児を受け入れていた。



【地図2…広島爆心地周辺】

## 越智實さんと満州

僕は満州(1)の孫呉で生まれたんよ。その後しばらくして、黒竜江省の黒河へ引越した。親父が満州国の警察官だったもんだからよく転勤があつて、引越しが多かったんよ。

黒河には松花江(2)といつて大きな川が流れていて、よく鮭のつかみ取りをしたのを覚えとる。川の向こうにはブラゴベシチェンスクっていう、ロシアの土地が見えたんよ。光があちこちで輝いてたね。それから黒河はとにかく寒くて、濡れタオルは振った瞬間凍っちゃうようなところだった。凍ったタオルでよくチャンバラしたんよ。

孫呉にいるときだったか、黒河にいたときだったか、小学校に上がる年齢になったときに「日本の教育を受けないといけん」ってことで、わしと兄貴(筆者の祖父)だけが親戚のいる広島県の呉市に行った。じゃけどやっぱり「二重生活になるから」ってなつて。いっただったかはつきり覚えてないけど、しばらくしてまた満州へ帰ってきた。

小学校四年生の頃は、公主嶺にいた。公主嶺は僕のお好きな司馬遼太郎の小説の中にも出てくる地名だね。

司馬遼太郎自身も、この場所の戦車隊におつたつていう話を聞いたことがある。ここで通つたのが、公主嶺国民小学校つてところ。この学校の隣にロシア人墓地があつたのを覚えとる。日露戦争のときに死んだ人のお墓だね。幽霊が出るなんて噂があつたりして、むしろはそこを避けて学校へ通つたもんよ。

公主嶺には一、二年おつたんだと思う。でもまた親父が転勤になつて、新吉林(3)に引越した。新吉林も一、二年おつた後、また引越しがあつて吉林に移つた。吉林では陽明小学校つていうところに通つてたんじゃけど、この五年生のとき、僕は終戦を迎えたんよ。

吉林省で、親父は今で言う県警本部長のようなことをしていた。そんなもんだからボーイも女中もおつたし、学校の送り迎えは黒塗りの大きい車でもしてもらうこともあつたりして、いい生活しよつたね。

でも終戦の数日前だったかに、ロシアが街に入つてきた(3)。鉄砲はバンバン撃つ、飛行機はどんどん爆弾を落とす。……すこかつたんじゃけえ。みんなキヤーキヤー言つて逃げた。

さらには終戦と同時に、満州の人が棒きれを持って家の中へだあーと入ってきた。やれ机だ、椅子だ、

筆筒だって、強奪して運んでいったもんだから、もうなあんにも無くなった。

ただうちの親父は警察のトップクラスにおったから、機密情報のようなのを知っとったんじゃないかと思うよ。終戦になる前から日本が戦争をやめるっていうのも知ってて、終戦になった瞬間に暴動が起きるっていうのもわかってたんだと思う。お金を茶筒に入れて庭に埋めてたのを覚えるんじゃないけど、そういうことを知ってたからんじゃないかと思うよ。おかげでそのお金は盗られなかったけえ、終戦後一年間、満州の収容所にいた間、何とか食べていけた。着物もぼちぼち隠しとったけえ、なんとかなったんだよ。

指示か何かがあって家から収容所に移ったんじゃないけど、そこでの生活は大変じゃった。食べ物はない、お医者さんはおらん、薬もない。一人が病気になるったら責任は全員に降りかかってくる。

さらには警察官でもひどいことした人なんかは、このとき引きずり出されて棒で叩き殺されとる。じゃけど、親父はそういうことされなかった。日本人のなかでもひどい人は、道路にいた中国人を退かしたり、虫けら扱いたんだよ。でもそういうことしてない人もあった。親父もそういうことせんかったんだよ。

新吉林にいたときに家が火事になったことがあったんだけど、そんなときに中国人が米や果物を持ってきてくれたことがあったんだよ。名前は覚えてないけど、顔は今でもよく覚えてる。きつと親父がむちゃくちゃせんかったから助けてくれたんだと思うんじゃないけど、それと同じように、収容所にいるときも陰からこっそり果物とかを差し入れてくれた親切な中国人がおったんだよ。

収容所にいる間に、親父は一度日本人狩りに遭って、シベリアに連れて行かれそうになった。連れてかれて、強制労働<sup>(4)</sup>させられそうになったんだよ。ただ親父はシベリアへ送られる汽車から飛び降りて、何とか収容所に戻ってきた。けど、一緒にいた書生の人は捕まっただままシベリアで三、四年強制労働させられとってね。もし親父も同じように強制労働させられて戻ってこんかったら、僕は残留孤児になっとった可能性がある。お袋は身体が弱かったもんだから、親父の支えなしで日本に帰ることはできなかったんだよ。たまたま親父が収容所に帰ってこれたから、家族みんな無事に日本に戻ってこれたんだよ。

親父が戻ってきてから、今度は収容所を出て、葫芦<sup>コ</sup>



島トウつていう所へ向かった。まあこれは大連ダイレンだった気もするし、よく覚えてないんだけど。そこにはLST(5)っていう、進駐軍の上陸用舟艇があった。これに乗れば日本に帰れるもんだから、僕ははまだ小さかった妹をリュックサックに入れて背負って、貨車で港に向かった。途中「こっち」って誘導してくれたら、果物とかをくれた親切な朝鮮人がおった。

港に着いても、船が来てなかったらしばらく野宿して船が来るのを待たないといけなかったんだけど、僕は運良くすぐに船に乗れたんよ。

消毒の粉をかけられてから船に乗り、日本へ向かった。二日は船に乗ってたかな。船の中は日本に帰る人でいっぱい、立て膝でないと寝れないほどぎゅうぎゅうで、蒸し暑かった。

二日の間にも、人が何人か亡くなったんよ。多分船に乗る前から病気だった人もおったんじゃないし、食事も含めあんまり衛生面もよくなかったから。じゃけど医者もおらんから、誰も病気を診てあげることができなくてね。夜になったら防水シートのようなものでぐるぐる巻きにした死体を、船尾から捨ててたんよ。船の外からドボンって音がしたら、「ああ、また一人死んだのう」と思うたもんよ。

終戦前は満州におるのが普通だったけど、周囲の目

が冷たくなってきたから早く日本に帰りたいかった。だから窓から島が見えたときは、安心したねえ。着いたのは確か、長崎か門司の港だった。終戦から一年くらい経つとったけど、これでも大分早く帰れた方なんよ。

結局、(この戦争は)満州国を作ったのが原因で。それで死んでもうた人もいて。ただ、良い悪いはわしらが決めることじゃない。歴史家が決めるんじゃないかと思ふ。

戦争はどれも利権争いよね。人間は醜いわいのう。どうしても利に走るからああいう風になる。欲がなかったらこういうのは全然ないんじゃないか、欲がない人間って言うのはおらんしのう。むつかしいわいね。

〔注〕

(1) 満州…満州事変による軍事行動により、一九三二年、日本が建国を宣言した国。清朝最後の皇帝溥儀を執政に迎えた。首都は新京。

(2) 新吉林…不明。現在その名は見られないが、話者によると、日本が作った街で、人造石油を作るために働いていた人の居住区だったという。松花江沿いにあり、吉林にも近かつ



たという。

(3) ロシアが街に入ってきた…一九四五年八月八日、ソ連は日ソ中立条約を侵犯し対日宣戦を布告し、当時日本が占領していた土地にも侵攻してきた。

(4) 強制労働…ソ連に降伏後、日本兵ら約六〇万人がシベリア等の開発のため強制労働させられている。極寒・重労働により約六万人が命を落とした。

(5) LST…アメリカ軍の戦車揚陸艦。戦車や兵員などを急速に揚陸する。

※余談だが、祖母が祖父から聞いた話によると、警察官だった祖父の父は中華民国のトップであった蒋介石から「中国で働かないか」と声をかけられたらしい。この点からも曾祖父の手柄が窺える。ちなみに終戦後は日本で暮らそうと決めていた曾祖父は、その誘いを断ったそうだ。



【写真…話者家族（昭和十八年三月十四日 公主嶺）】  
※祖父のアルバムより（右端話者實さん、左端祖父和夫<sup>かずお</sup>）

昭和18年3月14日。 滿州 公主嶺



### 取材、執筆を終えて

今回の執筆以前から、数冊ではあるが戦争文学を読んでいた。そのうちの一冊に林芙美子の『戦線』がある。実は今回お二人の体験を執筆するにあたり、比較のご本人の言葉を残した文体にしたのは、この『戦線』の影響がある。

私は執筆当初、いかに話者の体験をわかりやすく、正確に詳細に伝えるかという点を重視していた。そのためはじめは方言、年齢の食い違い等を整理し、話し手ではなく聞き手の言葉で執筆する予定にしていた。

しかし書き進めるにつれ、お二人が語ってくださったお話に対し、内容が薄くなるのを感じた。私は実際にお二人のような体験をしてきたわけではないため、自分の言葉に直そうとするとどうしても書けることに限界が出てしまうのがわかった。

そこでふと思いついたのが『戦線』だった。

尾道ゆかりの作家として知られる林芙美子は、従軍記者として実際に戦争を見、その様子をいくつかの作品にして発表している。『戦線』もそのなかの一つで、日中戦争の漢口攻略の様子が書簡体で綴られている。

砲弾はまださかんに撃ち出されています。顔を洗って小舎の裏へまわってみますと、一段小高くなった乾いた米田の中へ砲列が敷かれ、砲列の間

を行ったり来たりして号令をかけている兵隊がいました。すさまじい轟きがあるたびに、砲身はまるで飛ぶようにきりきりと、二三百米後方へあととざりして来ます。……(『戦線』二信より)

どのような場所で砲弾が撃ち出されていたのか、その勢いはどれほどであったかを記した文章だが、その様子が読者にも生々しく想像される。

書簡体ではあるが、芙美子の言葉に近い形で書かれたこの話は、実際を知らない私にも情景を思い浮かべやすく、また読みやすいと感じた。

この話のように、話者の言葉を残す形で記せば、読み手にも想像しやすく、内容の濃い、わかりやすい話となるのではないかと思った。そもそも話者の記憶の継承ということを考えると、こちらが話を整理するより、言葉のままを書き記すのが正しいのではないかとも思った。

そう考えてからは、『戦線』だけでなく、執筆者と体験者が異なり、また話者の言葉を残している作品にも目を通し、執筆の参考にした。

今回の話は、情景描写をはじめとした詳細さで『戦線』には大きく劣っている。だがそもそもインタビューをもとにしている今回の話と、従軍記である『戦線』とは性質が大きく異なる。取材力不足でそういった詳

細を伺いきれなかった私の落度ももちろんあるが、実際に見、体験した人とは話の書き込みと差が出るのはしょうがないことだと思う。だからこそ、私は話者の言葉を残すことで、林芙美子のような、実際に戦争を見てきた人の文章の詳細さに少しでも近づけようと努めた。

冒頭でも述べたが、戦後七十年経ち、戦争体験の継承に注目がなされている。さまざまな戦争体験が語られ、本となって世に出ているなか、事実と異なるのではないかという部分も含め話者の言葉をそのまま伝えるということとは、一つの意義があると考ええる。

『戦線』について考察をした荒井とみよ氏は、「林芙美子の従軍記」という論を次のような言葉で締め付けている。

わたしは中国からの「ペン部隊」への視線を撥ね退けようとして論じてきたのではない。押し入れられた側には目撃者も証拠品もある。しかし、侵略した側がその資料を隠蔽してきたら、わたしたちはその歴史から何を学ぶことができるだろう。

・戦争を知らないものにも戦争責任というものはあるのだから、書かれた事実を知ることが出発になる。・従軍記は葬られるべきではない。戦争を知らないわたしたちへの貴重な負の遺産なの

だから。

『戦線』は一度、著者によって葬られてしまった。しかし時を経て復活している。侵略した側が事実を隠しては何になるということだが、侵略側に限らず目撃者の誰か一人でも多くが隠さず記録を残すことで、歴史研究、文学研究が進み、また私たちが戦争自体について考える機会が増えるのではないかと思う。

今回の取材が、そういった記録の一つになれば幸いである。

そして最後になったが、今回の取材を快く受けてくださったお二人に、深く御礼申し上げる。

#### 〔参考文献〕

- ・荒井とみよ著『中国戦線はどう描かれたか―従軍記を読む』（二〇〇七年五月／岩波書店）
- ・五味文彦・島海靖編『もういちど読む山川日本史』（二〇〇九年八月／山川出版社）
- ・中国新聞社著『カープの歩み 1949-2011』（二〇一二年三月／中国新聞社）
- ・中沢啓治著『はだしのゲン わたしの遺書』（二〇一二年十二月／朝日学生新聞社）
- ・浜島書店編集部編著『新説日本史』（二〇〇六年十月／浜

島書店)

・林芙美子著『戦線』(二〇〇六年七月／中央公論社)

・「角川日本地名大辞典」編集委員会編『広島県』(角川日

本歴史地名大辞典34／一九八七年三月／角川書店)

―みやした・じゅんこ 日本文学科四年生―